

贗札の肖像

尾世川正明

おんな友達と住む
庭付きの小さな家を
東京の西の方で林のなかに探して借りる
朝晩に
わざとゆうれいのようにそつと裏口から出入りすると
なんだか彼女の同居人としてのよろこび
シツクリ感がたまらなく心地よく
たとえば試みに
わたしの新品のシャツを洗って庭に干して
わざと十日間ぐらいそのままほっておいても
なんの違和感もなくぶら下がったまま
シャツは干物のように干からびてしまう
ところが深夜のためにかるい菓子など買い揃えて
テレビの前にそつと置いておくと
いつの間にかちやんと減っているので
うれしくなって庭の木にも
小鳥箱を作つて餌を置いてみたりしたくなつてくる
掘り返した
庭の隅に
水仙の球根などを植える
出てきた先のとがったうすみどりの芽を見ている
彼女の横顔が
おさな友達の女の子の顔に見えてきて
ある日
「××ちゃん」と呼んでみたところ
ちよつと不思議な虫のような顔に変わつて
「それは私の名前じゃないみたいだけど」と
振り向いてくれたりもする

ほとんど食事は別々だけど
たまに食堂と一緒に食べる夕食で
きまつて彼女は冷えた白ワインを飲むので
つきあつて飲んでしまうわたしが
いつも先にすっかり酔っぱらつて
知らないうちに床で寝てしまう
そんなときも

朝にはたいていテーブルの上は
百人の女官の仕える

宮廷の奥の掃除が行き届いた

ちりひとつない鏡の表面ように片付いている

夏の夕暮れには彼女がゆつたりと風呂場で歌うので
家中に

古いイタリア歌曲がとてもよく響く

それがなにより楽しみでわたしは

仕事もせずにじつとリビングで音を立てずに待っている

旅行好きの彼女が旅行にでると

家の中はすっかり隅々まで空白に満たされて

わたしの生活は

時計のように金ぴかで無機質で正確になる

ところが

年初に南方の島でひどい火山の噴火があつた年に

彼女は春になつて旅に出かけたまま

いつまでたつても帰つてこない

わたしは彼女との楽しかつた生活を小説に写そうと

記憶をたどりながら

なんとか数百枚の原稿を書いたところで

ある朝目覚めたら

ずつと思ひ描けなかつた

彼女の顔が

財布のなかの

外国から持ち帰つた贋の十ポンド紙幣に描かれた

ジェーン・オースティンの肖像のように

美しく

脳裏にくつきりと見えてきた